

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 12, No. 2

神奈川県立生命の星・地球博物館

Jun., 2006



ナカムラギンメと オカムラギンメ

右上：ナカムラギンメ *Diretmichthys parini* (Post et Quéro, 1981), KPM-NI 16659, 208.0 mm SL; 左下：オカムラギンメ *Polymixia sazanovi* Kotlyar, 1992, KPM-NI 16665, 248.0 mm SL

せのう ひろし
瀬能 宏 (学芸員)

写真のナカムラギンメは、2006 年 3 月 16 日、神奈川県小田原市根府川沖で、江森正典さんが水深 130m に仕掛けた刺網によって漁獲されました。本種は、日本では東北地方や北海道沖合の深海から記録されており、今回の標本は相模湾からの初記録になると同時に、日本における南限記録になると思われます。

一方、オカムラギンメは、2006 年 3 月 21 日、愛知県渥美半島大山下の南東沖約 22km の地点で釣りをしていた三原幹生さんにより、水深 130m の海底から

釣り上げられました。この種は九州・パラオ海嶺以外からの報告がなく、今回の標本は第 2 番目の記録になると同時に北限記録になると思われます。

ナカムラギンメはキンメダイ目ナカムラギンメ科、オカムラギンメはギンメダイ目ギンメダイ科に分類されており、系統的には異なりますが、同時期に同水深から同じような名前の魚が当館に寄贈され、しかも両種とも興味深い分布記録であったことは、偶然とは言え「へえーっ」と思わせるに十分な話題と思いませんか？

ちょっとした時間に野鳥を楽しむ

かとう
加藤ゆき（学芸員）

私が本格的に野鳥観察をはじめたのは1990年ごろ、鹿児島県の大学に入ってからのことです。当時は、時間だけではたくさんあったので、長期休みや休講のたびにいろいろな場所へ出かけ、かなりの種類の野鳥を観察したものでした。しかし、勤め始めると時間が思うように取れません。そこで遠出はやめ、自分の身近な場所で野鳥を観察、研究対象とするようになりました。最初は鹿児島県の地方都市に勤めていたので、通勤途中に田んぼでタマシギやタゲリをみたり、職場の横の河原で調査を行ったりしました。そして、冬になると多数渡来するツル類を研究対象としていました。

しかし、現在住んでいる地域は、神奈川県内では比較的自然が残っているといわれていますが、鹿児島とは比べ物にならないほど野鳥の種類は少なく、少しがっかりしています。それでもよく家の周りを見ていると、庭には一年を通してスズメ（図1）をはじめシジュウカラやヒヨドリ、ムクドリ、キジバトがきて、家の前の空き地では4月になるとヒバリがさえずり、秋にはチョウゲンボウ（図2）やモズ、冬になるとホオジロ類やツグミがみられるといった具合に、なかなか季節感に富んでいます。また、勤め先である博物館でも、一年をとおして建物の周りでインホヨドリやハクセキレイ、セグロセキレイがみられ、早川ではカワガラスやカワセミ、カルガモを楽しむことができます。

このように、自宅と博物館を往復するだけでも、年間30種以上の野鳥を観察できます。時間さえあれば身の周りで鳥を探し、というほとんど職業病とも言える行動が楽しみの元になっているわけです。

今回は、双眼鏡を持たずにちょっとした時間を利用して楽しむことができるバードウォッチングのポイントを紹介しましょう。

庭や公園で楽しむ

私たちにとって一番身近な緑地は庭ではないでしょうか。個別の庭がない集合住宅でも、共用の公園や屋上庭園、ちょっとした花壇などが設けられているところも多く見受けられます。また、住宅地には子どもたちの遊び場として公園があるとところも多いですね。

そのような緑地には、意外と野鳥が集まってきます。高さ2～3m程度の樹木はシジュウカラやキジバトにとって絶好の巣づくりの場所です。公園などによく植えられているネズミモチやナナカマド、サクラなどの実はヒヨドリやムクドリ、イカル（図3）、時にはレンジャク類のエサとなります。生垣のツバキやサザンカの花が咲くと、メジロやヒヨドリが蜜を吸いにやってきます。花壇では、葉についた小さな虫を食べようとハクセキレイが歩いているときもあります。

少し大きな公園には人工の池やせせらぎが作られていることもあります。そのような水場には、シジュウカラ（図4）やヤマガラ、メジロ、キセキレイ、ヒヨドリ（図5）などが水飲みや水浴びにやってきます。なかにはサギ類やカワセミのように餌場として利用するものもあります。野鳥の目には、街中の緑地や池は、オアシスのようにうつるのかもしれない。

駅で楽しむ

駅に野鳥なんて、と思われる方も多いかもしれませんが、意外と見られるものです。郊外の駅ではホームに落ちていのお菓子のくずを狙ってスズメが歩き、

春になるとホーム上の屋根と柱のすきまではハクセキレイやムクドリが巣づくりをしていることもあります。また、近ごろはツバメが構内で堂々と子育てをしている光景も見かけます。電車を待っているときもポイントです。JR新宿駅は日本で最も乗降客が多く、頻繁に電車が入ってくる駅の一つに挙げられると思いますが、そのような騒がしい中でも、線路ではハシブトガラスが、ホームの端ではスズメがエサをさがしています。以前、京急蒲田駅で電車を待っていたときには、すぐそばを流れる川でカワウとスズガモが泳いでいたこともありました。厳密に言えば駅の中ではありませんが、ホームから楽しむことができる光景ではあります。

街路樹で集団ねぐらを楽しむ

都市緑化の一環として、少し大きな道路沿いや駅前の広場、ロータリーなどには樹木が植えてあることが多いですね。クスノキであったりサクラであったり、種類はさまざまです。あの街路樹が秋から冬にかけて小鳥のねぐらとなっていることをご存知でしょうか。夕方、周囲が薄暗くなってくると、あちこちから集まり始め、とてもにぎやかになります。たいていは、スズメやハクセキレイ、ムクドリなどで、違う種類が混ざることあまりなさそうです。これらの鳥は、繁殖期にはつがいごとに分かれて子育てをしますが、繁殖が終わった秋から冬にかけては集団でねぐらをつくる、という習性を持っています。数百羽、数千羽もの小鳥が夕方になると集まり、集団で眠る光景は圧巻です。

見つけ方は簡単です。夕方、「チュンチュン」だとか「チッチッ」、「ギョルギョル」などにぎやかに鳴く声を頼りに探すこと



図1. スズメ。



図2. チョウゲンボウ。重永明生撮影。



図3. イカル。重永明生撮影。

もできますし、ねぐらとなっている樹木の下はフンで真っ白になっています。おもしろいことに、ねぐらとなる樹木は決まって人が多くにぎやかな場所か、あるいは街灯で明るく照らされているような場所にあり、あまりさびしい場所には見られません。これは、にぎやかな場所のほうが、フクロウなどの捕食者に襲われる危険性が低いからだ、といわれています。

建物で野鳥の子育てを楽しむ

なかには、建物で子育てをする野鳥もいます。家の軒先にお椀型の巣を造るツバメ、戸袋や排気口などに入り込むスズメやムクドリなどがその代表です。イワツバメやヒメアマツバメは高層建造物に集団で巣を造りますし、意外なことにビルの屋上や排気ダクトでチョウゲンボウが繁殖した例もあります。また、警察が出動し、道路封鎖をさせたことで有名になったカルガモ(図6)は、皇居近くのビル街の人工池で繁殖しました。これらの鳥は元々は自然の環境の中で繁殖をしていたのですが、おそらく人間があらゆる環境に進出するにつれて人工建造物が増えたため、鳥のほうもそれに適応していった結果なのでしょう。

身近で野鳥の子育てを観察できる絶好の機会ですが、観察をするときは巣に近づきすぎないようにしてください。人間が頻繁に近づくと、親鳥は必要以上に警戒し、繁殖を放棄してしまいます。すると、卵はふ化せずヒナは死んでしまいます。巣を見つけても覗きたい気持ちを抑え、少し離れたところからそっと観察するようにしてください。

電車や自動車から楽しむ

私の自宅から博物館まで、私鉄を乗り継いで40分ほどかかります。この間、晴れている日には車窓から景色を眺めています。特に小田急線渋谷駅から栢山

駅にかけて広がる田園地帯では、知らないうちに野鳥を探しています。観察のポイントは水路やあぜ、河川を見逃さないようにすることです。春にはつがいとおぼしきカルガモがあぜに座り込み、その側を巣材をくわえたムクドリやハシボソガラスが飛んでいます。初夏にはコアジサシが酒匂川周辺でみられ、秋から冬にかけてチョウゲンボウやノスリなどが飛んでいることもあります。

自動車の助手席に乗っているときも絶好の観察機会です。例えば、自宅から博物館へ車で行くときに小田原厚木道路を通ることが多いのですが、二宮ICから小田原方面へ車に向かっていくと、料金所まではカラス類やオオタカ、ヒヨドリがよく見られます。そして酒匂川では冬はノスリ、初夏にはコアジサシ、イワツバメが飛び、運が良いと電灯に止まっているウミネコやヤマセミも見られたりします。小田原西IC付近では、冬にハイタカ(ツミ?)が見られたときもありました。一方、海岸沿いを走る西湘バイパスは海鳥の宝庫です。ウミネコ、セグロカモメといったカモメ類や、時としてミズナギドリ類も見られます。首都高速道路を走っていたときには、新宿あたりでチョウゲンボウがトビを追いかけているのを観察したこともあります。

このように、電車や自動車に乗っている退屈な時間を利用して、バードウォッチングを楽しむことができます。ただし、観察できる時間は数秒程度ですから、あまり小さな鳥は識別できません。また、事故の元になるので、自動車を運転しながらの観察は絶対に止めてください。

うれしい発見

仕事柄、地方へ出張することが一年に何回かあり、私用でもいろいろな場所へ出かけます。その移動の途中におもしろ

い経験をしたことがあります。2004年冬に東海道新幹線に乗って名古屋方面へ向かっていたときのこと、天竜川(静岡県)を通ったとき、河原にたたずむコウノトリを発見しました。見られたのはほんの数秒でしたが、その特徴のある姿を間違えるはずもないと考え、兵庫県立コウノトリの郷公園へ報告しました。そうしたところ、確かにその周辺で確認されているが、新幹線に乗って見られるなんて運が良いねと言われました。

沖縄のある空港では、飛行機に乗った後、発着の都合により駐機場で待たされたことがありました。手持ち無沙汰なので外を見ていると、オオチドリがメダイチドリとオオメダイチドリと一緒に飛行機のすぐ横の芝生にいたこともありました。どちらも偶然に発見したとはいえ、ちょっとうれしい瞬間でした。

「鳥」という動物は、おそらく植物や昆虫と並んで、私たちにとって最も身近な生きものの一つでしょう。公園ではスズメやキジバトがみられ、人工建造物が多い都心でもヒヨドリやカラスの姿を必ずといってよいほど見かけます。この季節、渡来した夏鳥を楽しみにハイキングに出かけたり、旅行をかねて固有種や珍鳥、迷鳥を見に遠くの島へ行ったりするのも楽しいのですが時間もお金もかかります。その点、移動途中や週末の休みなど、ちょっとした時間を利用して野鳥を見るのは手軽で誰にでもでき、時にはうれしい発見もあります。ちなみに、このような場所に野鳥なんていない、双眼鏡を持っていないから見分けられない、といった先入観を持たないほうが楽しむことができます。私の知人は、山口県の山中でドライブ中にコウノトリを、秦野市の丘陵地で散歩中にアカコッコを見つけたこともありますよ。



図4. シジュウカラ. 重永明生撮影.



図5. ヒヨドリ. 重永明生撮影.



図6. カルガモ.

ふしぎな生きもの 菌類 ～動物？ 植物？ それとも？～

でがわようすけ
出川洋介（学芸員）

皆さんは、世界一大きな生きものが何だかご存知ですか？ 世界最大の動物はシロナガスクジラ（体長約25m、体重約100t）、最大の植物は北米のセコイアで、高さは100mを超え重量は1500tにも達するといえます。では、キノコの横綱は何でしょう。一昨年の9月、藤野町の力石さんから連絡を頂き、ニオウシメジを観察することができました(図1)。数十本のいまだ、開ききっていないキノコが束をなして幅50cmほどにも達していたのでしょうか。キノコの根元は、まるで体温があるかのような熱を帯びており、小さな子供の体ほどもあるキノコとの対面はなんとも迫力のあるものでした。藤野町教育委員会のご厚意で、ひとかたまりを頂き、たいへん貴重なものですので大事に持ち帰って凍結乾燥の後、樹脂含浸標本として博物館に保管しました。このニオウシメジは、過去に重さ100kgを越えるまで育った記録があります。

ところが10年ほど前に、「世界最大級の生きものはキノコだ」という論文(Smith et al. 1992, Nature, 356:428-431)が発

表され、話題をよびました。しかも、そのキノコはごく身近なナラタケの仲間だということです(図3)。とはいってもキノコそのものが巨大化したわけではありません。キノコは、植物でいえば花に相当する部分です。キノコの本体は、地中や朽木の中に這いめぐらされた根のような細い菌糸で、特にナラタケの仲間は、菌糸がたくさん集まって針金のようなになった“菌糸束”を作ります。これはまるで毛のように見えることから、昔の人たちは「山姥の髪の毛」という面白いあだ名をつけました(図2)。この北米の研究によると、15ヘクタールにわたる森林内の各地から集めたキノコや菌糸束を遺伝的に調べたところ、それらは一つのクローンをなしており同じキノコの体だとみなすことができたのだそうです。森林に生息するこの菌の総重量は少なく見積もっても約100t、胞子が発芽してから年齢は1500歳を越えると推定されましたが、2000年には更にこれを凌ぐ数値が記録されているようです(Volk 2002, Inoculum, 53:4-8)。キノコが、シロナガスクジラに匹敵するような

サイズをしているなんて、にわかには信じられませんね。

実は気がつかないだけで、私たちの身の回りにはキノコやその仲間たちがたくさん生きています。昨年の秋、博物館の近くの空き家にキノコが発生！という情報が入りました。現場検証の気分で空き家を訪ね、恐る恐るドアをあけると、天井からの雨もりが数年も続いたのでしょうか、じつりと水分を含んだ量の縁に、よきよきとヒトヨタケ（一夜茸）の仲間が生えていました(図4)。ていねいに畳の表面を観察してみると、どろどろとした白い血管のようなものがあちこちを這い回っており、その周辺に小さなキノコのようなものが見つかりました。この正体は、変形菌（またの名を粘菌）です。血管のように見えたものは巨大なアメーバで、これが十分にえさを食べつくすと、一晩のうちに姿を変えキノコのような姿（子実体）となって、ホコリのような胞子を飛ばします。変形菌の本来のすみかは、林の中の朽木や枯葉です。梅雨明けごろ、森の地面をルーペでたんねんに探してみ



図1. ニオウシメジ。図2. 枯れ木の表面を這うナラタケの菌糸束“山姥の髪の毛”。図3. ナラタケ。図4. 空き家の古畳に発生したヒトヨタケの仲間。図5. 古畳の上を這う変形菌のアメーバ。図6. アメーバから子実体に変身しつつある変形菌ススホコリ。図7. 変形菌クダホコリの未熟な子実体。

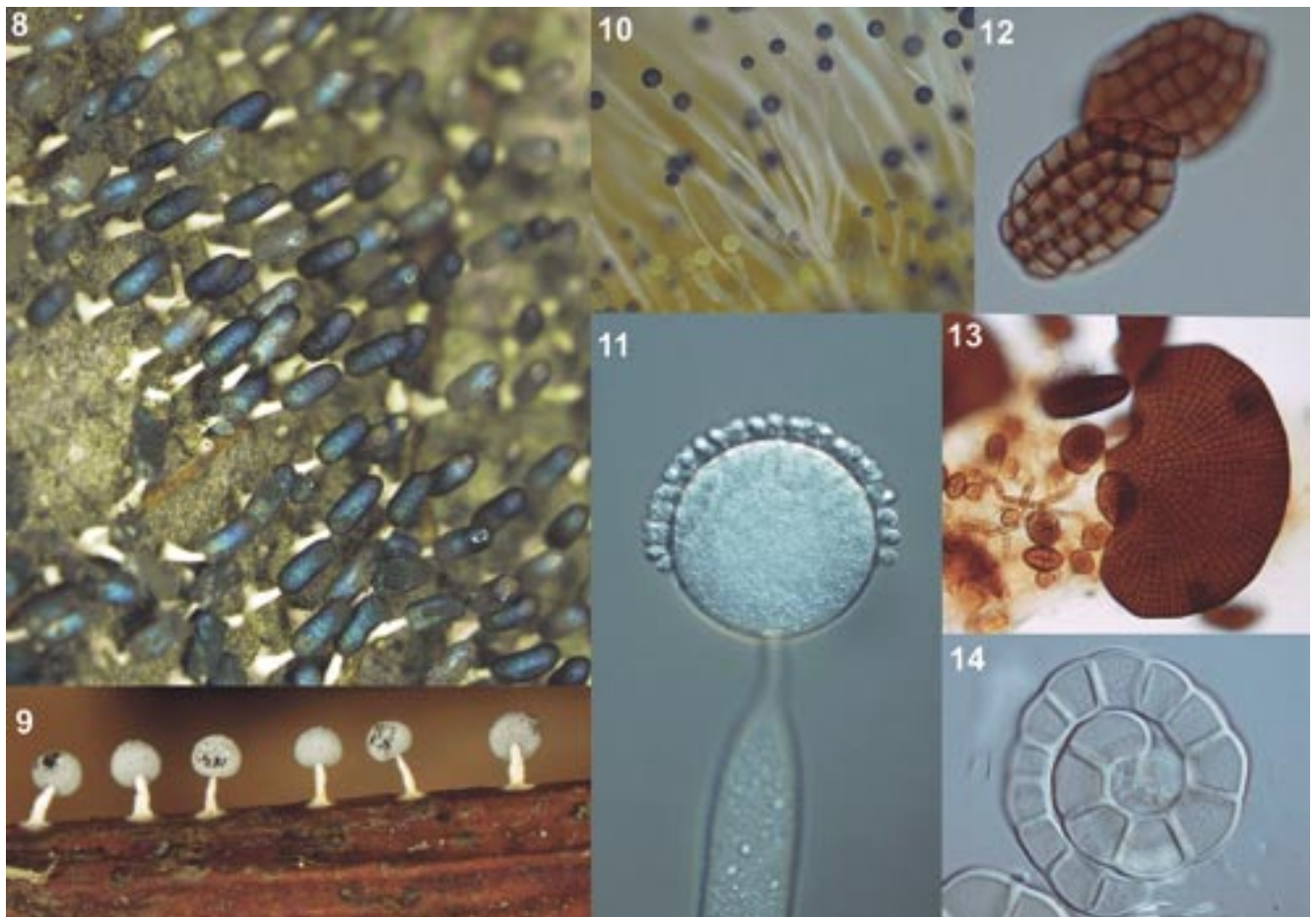


図 8. 変形菌ジクホコリの子実体。図 9. 変形菌カタホコリの子実体。図 10. ミカンに生えたケカビ。図 11. 人間の遺体に生えることもあるカビ、トムライカビ。図 12. 枯葉のカビ、ジクチオスポリウムの孢子。図 13. 枯れ木に生えたカビ、ミコエンテロロビウムの孢子。図 14. 枯れ草のカビ、ホブソニアの孢子。

ください。色とりどり、形も様々なかわいらしい変形菌の子実体がみつかるはずですよ(図 6-9)。

しかし、キノコも変形菌も、いったい、どこからやってきて何故、家の中などに生えてしまったのでしょうか？ 実は、彼らは「孢子」で増える微生物の仲間です。孢子は 1mm の百分の一ほどで、簡単に風に乗ってとばされます。ですから、気がつかないだけで私たちの身の回りには目に見えない孢子がたくさん飛んでいるはずなのです。そんな気持ち悪い！などと思わないでくださいね。孢子が発芽して育つためには十分な湿度が必要ですから、毎日、掃除さえしていれば大丈夫ですし、健康であれば孢子を吸い込んでも全く問題はありません。しかし！よく注意してみましょう。湿りがちな風呂場の壁や汚れた窓ガラスの上、あるいはうっかり忘れていた食べ物の上(図 10)に、しみのようなカビがみつかり

ませんか？

実は、顕微鏡を使ってながめてみると、カビの仲間もキノコとなんら変わらないことがわかります。部屋の中だけではなく、外に出て野山で古くなった枯葉や枯れ枝を探し、セロファンテープを貼り付けてカビをはがしとり、観察してみましょう。運がよければ、顕微鏡下で、芸術品のような形をした意外なカビの姿に出会えるはずです(図 12-14)。

以上、紹介してきたキノコ、変形菌、カビはいずれも「菌類」という生きものの仲間です。残念ながら、菌類という言葉には、バイキン(細菌)、病原菌などあまり良いイメージがありません。たしかに、人間の水虫や、作物をだめにする植物の病気を起こす菌類もあります。しかし、おいしい食用キノコも菌類ですし、酒、味噌、醤油などの発酵食品を作るのに菌類は欠かせません。アオカビから抗生物質を発見した学者は多くの人の命

を救い、ノーベル賞を受賞しました。

ギリシア時代の学者たちは、この世の生きものを動物と植物の二つに分け、地面に生えて動かないように見える菌類は、色の無い原始的な植物なのではないかと考えました。しかし、自然界の菌類は、私たち人間をふくめた動物や植物の遺体(図 11)や排泄物を分解する縁の下の力持ちとして活躍しており、動物とも植物とも異なる独自の生きものだということが明らかにされてきました。さらに、最近の遺伝子解析の研究によれば、菌類に一番近い生きものは動物だとも言われています。大昔に、共通の祖先から分かれて、違う道を歩んできた兄弟として、菌類から学ぶことはたくさんありそうです。

みなさんも、この夏、「菌類」のふしぎに触れてみませんか？ 2006 年 7 月 15 日～11 月 5 日の予定で、特別展「ふしぎな生きもの 菌類 ～動物？ 植物？ それとも？～」の開催を予定しています。

地球上には、あらゆる場所に様々な種類の花が咲いていて、世界中で約20万種もあるそうです。自然の中だけでなく、私たちの身の周りである家の中やベランダ、道端や公園などにもたくさんの花が咲いています。ちなみに、ウサギ小屋程度の我が家にも、なんと11種類の花が咲いていました！当館の周りにも四季を通じていろいろな花が咲き、来館者の目を楽しませてくれています。また、館内の展示室にも各所に花の展示があり、それぞれの美しさをあらわしています。ただし、展示室の花の多くは、毎日水をあげなくてもよい、手間のかからないものですが・・・

それらのなかでも特に変わった「花」が、当館の地球展示室に咲いています。それは、「砂漠のバラ (desert rose デザート・ローズ)」と呼ばれるものです。一つは、地球展示室の中央にある大型展示ケースの中に納まっているもので、アメリカ合衆国オクラホマ州の砂漠に咲



図1. アメリカ合衆国オクラホマ州ノーマン産・重晶石 (KPM-NM0020096)。



図2. メキシコ合衆国チワワ州ナイカ産・石膏 (KPM-NM0020097)。

いていたものです (図1)。もう一つは、大きな壁に埋め込まれたガラスケースの中ほどに納まっている、メキシコ合衆国チワワ州の砂漠に咲いていたものです (図2)。

もう、これらが植物ではないことに気がつかれたでしょう。では、为什么呢？

実は、この「砂漠のバラ」は鉱物です。鉱物の形がまるでバラの花びらのようであるため、この名がつけられました。展示標本のうちアメリカ合衆国産のものは、硫酸バリウム (BaSO_4) が結晶化した重晶石 (Barite バライト) という鉱物でできています。一枚一枚の花びらの大きさは3～5cmほどです。それらがいくつか集まってバラの花のような構造を作り、さらにそれらの花が無数に集まり、大きさ70cm、重さ約300kgの塊となっています。ちなみに、硫酸バリウムは胃のレントゲン写真を撮るときに飲む白い液体の原料です。一方、メキシコ産のものは硫酸カルシウム (CaSO_4) が結晶化した石膏 (Gypsum ジブサム) という鉱物です。こちらは、花びらの大きさは5～10cmと大ぶりですが、標本の大きさは約30cmほどです。花びら一枚一枚の形がはっきりしているのが特徴的ですが、バラの花とは言いがたい気がします。

当館では、その他にも砂漠のバラ標本を所蔵しています。なかでも横浜市在住の石川堯さんからご寄贈いただいたアルジェリア産の標本 (石膏) は、一枚の花びらが大きく、大きさが約50cmと目を見張るほど立派なものです (図3)。残念ながら常設展示はされていませんが、企画展や特別展などで紹介してきました。今後も機会がありました



図3. アルジェリア産・石膏 (KPM-NM0020098)。

ら展示したいと思います。なお、砂漠のバラには、炭酸カルシウム (CaCO_3) が結晶化した方解石 (Calcite カルサイト) でできているものもあります。

では、このような砂漠のバラは、どのような場所で、どのようにしてできるのでしょうか。砂漠のバラが採集されている場所は、展示標本に見られるようにアメリカ合衆国オクラホマ州やメキシコ合衆国チワワ州の砂漠地帯や、アフリカのサハラ砂漠など極端な乾燥地帯です。砂漠地帯の降水量はわずかですが、まとまった雨が降ることもあります。その大部分は蒸発してしましますが、一部は地表から浸透して地下水となります。この地下水が流れてオアシスなどで地表に現れます。そしてまた、一部の地下水は毛細管現象によって地表に向って上昇し、蒸発していきます。砂漠のバラは上昇してきた地下水が蒸発する際に、その中に溶けていた硫酸バリウムなどの成分が濃集し、さらに周りの砂を取り込みながら結晶化してできたものです。地下数cm～数mのところに多く生成するといわれています。砂漠のバラの色は、結晶の中や表面にある砂粒の色が反映されているので、故郷の砂漠の色といえます。

砂漠のバラは砂漠地域の特殊な環境でしかできないと思われていますが、なんと身近で形成された例もあります。縄文時代の貝を採集するため、横浜市金沢区六浦町のポンプ場の沖積層の泥を乾燥させていたところ、5mm程度の可愛らしいバラの花状の石膏が結晶化しました。泥の中に硫酸カルシウムの成分が含まれていて、博物館内の乾燥した環境の中でできたようです。

なぜバラの花のような形になるのか、その原因はまだよく分かっていません。植物の花の形もそうですが、自然がつくる形の不思議といえます。

さて、砂漠のバラとは、鉱物の形状がバラの花に似ているためつけられたのですが、植物にも「砂漠のバラ」と名づけられているものがあります。キョウチクトウの仲間、原産地は東アフリカで熱帯や亜熱帯地域に生息するものだそうです。蛇足まで。

館長が替わりました



4月1日付けで新たに館長に就任した斎藤靖二です。私も、青木淳一前館長と同様に自然が大好きです。当博物館をさらに楽しい博物館にしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ライブラリー通信

コケの魅力

しのぎよしこ
篠崎淑子（司書）

前回、「しもばしらをつくらう」という原稿を書くにあたり、実際に冷凍庫で霜柱を作ってみたのですが、失敗しないためには霜柱が出来ている土を使うとよいと本に書いてあったので、博物館の周りを探してみました。いくつかポイントがあったのですが、博物館から入生田駅に向かう道の途中にコケがたくさん生えているところがあって、そこに霜柱が出来るので、実験にはその土を使いました。そのとき改めてコケを見たのですが、コケって美しいですね。雨の日には特に色が冴えて、梅雨時も楽しく過ごせそうです。

少し前になりますが、コケ玉が流行ったことがあります。コケの持つ柔らかな感触が現代人のとげとげした心を癒すとか。『NHK趣味の園芸』のバックナンバー（2004年7月号）に作り方が載っていたので、実際に作ってみました。コケ玉は根洗いや草玉と呼ばれる、盆栽の世界で親しまれていたものの変形で、日本人は古くからそういうものを作って自然を愛でていたようです。こんな話を人にしていたら、コケが好きなら箱根美術館に行くといわれました。コケ好きにはたまらないすばらしい庭があるそうです。『コケの世界—箱根美術館のコケ庭』（エム・オー・エー美術・文化財団発行）という本がライブラリーにあります。写真をただでさえすばらしい庭なのでぜひ行きたくなりました。

ライブラリーでコケを調べるための図鑑としては、『原色日本蘚苔類図鑑』（保育社）、『日本の野生植物コケ』（平凡社）、『フィールド図鑑コケ』（東海大学出版会）などを所蔵しています。

特別展

ふしぎな生きもの 菌類 ～動物？ 植物？ それとも？～

7月15日（土）～11月5日（日）

おいしいキノコ、食卓に欠かせない発酵食品など、私たちの生活は菌類に支えられています。ときに悪さをして怖いイメージもありますが、ほとんどの菌類は自然の中でのびのび生きており、美しくもあり、思わず楽しくなるような素顔をしています。今回の特別展では、身近にしながら気がつきにくい、動物でもない、植物でもない「ふしぎな生きもの 菌類」の世界に皆さんをご案内します。

観覧料／	20歳以上（学生を除く）	200円
	20歳未満・学生	100円
	高校生以下・65歳以上	無料

催し物のご案内

● 野外観察と室内実習「先生のための地層と化石入門」[博物館と野外]

日時／7月25日（火）～7月27日（木）の3日間
連続講座 10:00～16:00

対象／教員と一般（大人向き）12人
申込締切／7月4日（火）消印有効

● 室内実習「貝のかたちを調べよう」[博物館]

日時／①ホタテのひみつ＝7月28日（金）②アサリのひみつ＝7月29日（土）③キサゴのひみつ＝7月30日（日）10:00～15:00

対象／小学4年生～大人 各回10人
申込締切／①②③とも7月11日（火）消印有効

● 学習会「菌類をテーマとした自由研究に挑戦しよう」[博物館]

日時／8月1日（火）・27日（日）の2日間
連続講座 10:00～15:00

対象／小学4年生～高校生 20人
申込締切／7月18日（火）消印有効

● 室内実習「サルからヒトへの進化をさぐる」[博物館]

日時／8月2日（水）10:00～15:00
対象／小中学生と教員 20人

申込締切／7月18日（火）消印有効

● 室内実習「コンピュータで地球を見る—リモートセンシング入門—」[博物館]

日時／8月4日（金）10:00～15:00
対象／教員 20組

申込締切／7月18日（火）消印有効

● 室内実習「岩石プレパラートを作ろう」[博物館]

日時／8月9日（水）・10日（木）の2日間
連続講座 10:00～15:00

対象／教員 10人
申込締切／7月18日（火）消印有効

● 室内実習「ミニ火山を作ろう」[博物館]

日時／①8月11日（金）②18日（金）10:00～15:00

対象／小学4年生～中学生と保護者 各回10組
申込締切／①は7月25日（火）②は8月1日（火）消印有効

● 室内実習「私たちの祖先はだれ？」[博物館]

日時／①8月21日（月）②22日（火）10:00～15:00

対象／小学4年生～中学生 各回20人
申込締切／①②とも8月1日（火）消印有効

● 室内実習「やさしくくだものの観察」[博物館]

日時／8月23日（水）13:30～15:30
対象／小学生～高校生と保護者 24人

申込締切／8月8日（火）消印有効

● 室内実習「きのこを育ててみよう」[博物館]

日時／①9月3日（日）②17日（日）10:00～15:00
対象／小学4年生～高校生 各回20人

申込締切／8月15日（火）消印有効

● 野外観察「秋の植物ウォッチング」[舞岡ふるさと村（横浜市戸塚区）の予定]

日時／9月23日（土）10:00～15:00
対象／小学生～高校生と保護者 40人

申込締切／9月5日（火）消印有効

● 野外観察と室内実習「変形菌観察会」[博物館とその周辺]

日時／9月30日（土）・10月1日（日）の2日間連続講座 10:30～15:30

対象／どなたでも30人
申込締切／9月12日（火）消印有効

● 野外観察「河原の石の探検隊—石ころ実物図鑑を作ろう—」[相模原市高田橋入口]

日時／10月8日（日）10:00～15:00
対象／小学4年生～中学生と教員 20人

申込締切／9月19日（火）消印有効

● 室内実習「動物ウォッチング—体のしくみとえさの関係—」[博物館]

日時／10月14日（土）10:00～15:00
対象／小学4年生～大学生 15人

申込締切／9月26日（火）消印有効

催し物への参加について

上記の催し物の受講料は無料です。ただし、野外観察や実習作業を伴う講座は傷害保険（1人・1日50円）への加入をお願いします。

また、参加には事前の申込が必要です。応募多数の場合は抽選となります。参加方法や各行事の詳細については、下記の連絡先までお問い合わせください。ホームページでも詳細を見ることができます。

申込・問合せ先

神奈川県立生命の星・地球博物館

企画情報部企画普及課

所在地 〒250-0031

小田原市入生田499

電話 0465-21-1515

ホームページ <http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

愛らしいゴキブリたち

たかくまさとし
高桑正敏（学芸員）

当館の昆虫展示における目玉は？とよく聞かれます。私は習慣的に「メダマヤママユ！」とか「メダマカマキリ！」と反応してしまうのですが、それ以上に自慢できるのがテントウゴキブリなのです。「昆虫の世界」展示における擬態コーナーの一角に、オオテントウ類に混せて展示してあるのにお気づきでしょうか？

私にとって、このゴキブリは憧れでした。ゴキブリのくせにテントウムシそっくりで、それこそおとぎの世界に登場するような空想めいたイメージだったからです。「擬態—自然も嘘をつく—」（W. ヴィックラー著、羽田節子訳、1970、平凡社）という本の中でその存在を初めて知ったのですが、そこに図示されていたのは写真ではなくて描かれたカラー絵でした。つまり、よほど珍しい種なのでしょう（その本にはよく見かけられるように書かれてはいますが）。実際、私自身はその後もずっと標本も写真すらも見ることはありませんでした。

でも、当館の擬態展示を企画する中で、どうしても欲しい種類でした。そこで当時、標本収集を依頼していた昆虫研究者Nさんに「何としてでも！」とお願いしていたところ、「いくつか手に入ったよ！」という朗報が来たのです。思わず「全部ちょうだい！」と叫んでしまいました。インドネシアのスラウェシ島から大量のテントウムシを入手したところ、その中に混じっていたとのことですが、1匹ずつ標本整理をしていて初めてテントウゴキブリが混じっていたことに気づいたそうです。Nさんのような超一流のプロですらちょっと見にはわからなかったほどですから、そのテントウ

ムシ擬態の完成度の高さに驚きます。

当館の「昆虫の世界」にはもう1種のゴキブリが標本として展示されています。「変わった姿・形」コーナーのシンボル展示ケース内のヨロイモグラゴキブリです。その和名から連想できるように、種名ラベルを見なければゴキブリとはわからないほど大型で奇妙なこの昆虫は、地中で家族生活を営む（子育てを行なう）という変わり者としても有名です。ゴキブリというイメージがないためか、分布地のオーストラリアではペットとして飼われることもあり、かわいいので手のひらに乗せてなであげる子供たちもいると聞きました。

さて、愛らしいゴキブリといえば、どうしても東南アジアのルリゴキブリ類を紹介しなければなりません。その美しい色彩には、誰しもが思わず目を見張ることでしょう。熱帯のジャングルの中で強烈な陽射しを浴びて活動するその姿は、もはやゴキブリというイメージがありません。つい先日、タイ北部で山頂に吹き上がってくる昆虫を次々と採集していたときです。すばやいがおかしい飛び方のものを採集してみたら、なんとオオルリゴキブリの1種だったのです。日中にジャングルの上を飛ぶゴキブリなんて信じられますか？

これらルリゴキブリ類はけっして多くはなく、むしろ発見は困難な仲間です。それに比べ、東南アジアでは下草の葉上にそれこそたくさん見かけられるのがキスジワモンゴキブリです。黄色のスジが目立って美しいといえそうですが、こちらはけっこ「本格的な」ゴキブリで、

じつはおなじみのクロゴキブリなどと同じゴキブリ科に属します。

ところで、ゴキブリの生態写真図鑑が発行されているのをご存知ですか？ その書名もズバリ「ゴキブリだもん〜美しきゴキブリの世界〜」（鈴木知之、2005、幻冬社）。「本格的な」ゴキブリもたくさん登場しますが、前述のヨロイモグラゴキブリ



図3. キスジワモンゴキブリ。タイ東部；高桑撮影。

はじめ愛らしい種がいくつも紹介されていて、みなさんのゴキブリ観を変えてしまうかも。じつは、当館のある学芸員の奥さんは、その愛らしいゴキブリのコレクターなのです（夫の方だったらゴキブリ亭主と言われかねないですね）。そうそう、残念なことこのゴキブリ図鑑にもテントウゴキブリが出ていません。よっぽど珍しいのか、あるいは葉の上で生活しているときは、プロをもあざむくほどテントウムシにそっくりなのか。いつか私の目で生きている姿を見てみたいものです。

いずれにしろ、みなさんにはテントウゴキブリの展示標本をじっくりとご覧いただきたいと思います。もしかすると、日本では当館でしかテントウゴキブリを展示していないかもしれませんよ。なぜって、Nさんからはずべて頂戴してしまったのですから。

お断り：ここではあえてテントウゴキブリの標本写真を掲載しません。いじわるなようですが、実際にみなさんの目で標本を見ていただきたいからです。



図1. オオルリゴキブリの1種。タイ北東部；高桑撮影。



図2. ルリゴキブリの1種。台湾中部；高桑撮影。

自然科学のつば
第12巻2号（通巻45号）
2006年6月15日発行
発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 斎藤靖二
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846
<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

編集 木場英久
印刷所 文化堂印刷株式会社

© 2006 by Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

R100

PRINTED WITH
SOY INK
Trademark of American Soybean Association